

第1回シンポジウム—2

「南アジア」と「インド世界」

—周縁からの視点—

小西正捷

1 はじめに

1988年に発足した日本南アジア学会は、20周年を迎えたのを期に、年次大会とは別に、2007-08年に6回にわたる連続シンポジウムを開催した。その第1回の冒頭での‘前座’的発表として、極めて個人的な回顧ながら、本学会の20年のみならず日印関係の50年の歴史の中で私なりに関わってきたことをも振り返りつつ、「南アジア」ないしは「インド世界」の捉え方についての考えを述べた¹。50年、半世紀というとやや大仰に聞こえるが、実際私が「インド」を強く意識しだしたのは、1955年のバンドン会議（アジア・アフリカ会議）以来のことである。「少国民」として敗戦を迎え、打ちひしがれたような当時の日本の世相にあって、それとは対照的な（かつては日本を含めた大国の植民地であった）アジア・アフリカの首脳たち、とりわけインドのネルー首相の言動は輝かしかった。そのころの神田の古書店街には、戦前に発行された「印度」や「ガンダー」「タゴール」に関する古書があふれ、憑かれたようにそれらを買いあさる傍ら、1956年の日印文化協定締結を期に来日しだしたインドの優れた音楽・舞踊家たちの公演（もったいなくも、いつもガラガラであった）にも足を運んで、インドに対する憧れを募らせていった。

この頃までにはインド政府招聘による留学制度も発足し（1951～）、戦後インド研究の第一線を担う研究者たちが旅立っていった。そのなかには中根千枝（社会人類学、とくに母系制社会の研究）、荒松雄（インド・イスラーム中世史）、土井久弥（ヒンディー文学）らがいた。その分野は「印哲梵文」や「仏教学」がインド研究の主流であった当時としてはやや珍しい、いわば周縁的な分野である。新生インド政府があえてそれ

を鼓舞した面もあったのかもしれないが、海外留学といえはまずはアメリカなどからの資金を得、それをもって現地調査、というパターンが一般的であった時代に、(貧しいはずの?) インド政府が、外貨の用意もないほどさらに貧しかった日本からの留学生を受け入れ、教育してくれた事実は、幾度強調してもしすぎることはない。そして私もまた1961-64年にこの制度の恩恵を受けてカルカッタ大学に留学したが、美術・考古学という(これも浮世離れした)その専攻分野は、なぜ「印哲」やインド仏教ではないのか、あるいは新生インドの政治・経済ではないのかという日本人からの疑問、もしくはなぜ医学・工学のような「役に立つ」ものでないのかというインド人の側の質問にしばしば困惑させられた。そこにはいまだ、日本とインドとの間の認識の大きな断絶があった。

2 「何学」でもなく

しかし私自身、どの分野であるにせよ、自ら確固たるテーマを持っていたわけではなかった。海外留学といえはすでに確たるテーマを持ち、そのさらなる展開を目指すものなのであろうが、学部を卒業したばかりの弱冠22歳で、卒論も、先史時代の土偶の宗教的観念から見る生業形態の変化、などという、まるで何学なのかわからないものであった。正直に言うと、私が惹かれていたのはむしろ現代美術にも通ずる先史時代の力強い造形力の由来であったが、それは何学で研究できるのだろうか。美学や宗教学ではあまりに抽象的に過ぎるとしても、いったいそれは美術史の範疇なのか、考古学、あるいは宗教人類学なのか。この迷いを引きずったままの留学であったが、所属を決めねばならず、とりあえずインド古代文化史専攻に身をおいた。しかし美術史が取り上げるのはいわゆる名品ばかりで、そうでないものを扱う論理は、「古拙・未発達」か「退廃」という主観的かつ進化主義的尺度であるかのようであった。かつその分析の視点は主として様式論であり、他作品との類似や相違、あるいは影響関係が議論の中心であるかのように思えた。

ただし図像学 iconography/iconology は、これらの造形の生成と変容に関わる思想的・社会的背景を垣間見ることができる点で、大いに興味を持てた。ことに時代・地域の差によって極めて多様でダイナミックな展開を見せるヒンドゥー図像学は静的な仏教・ジャイナ教の図像学よりずっと面白く、なぜこのような造形が生まれてくるのか、またその変転

の必然性、ひいてはその背後にある精神的内実、いわば心性 *ethos/mentality* が私の関心の中心となった。しかしこのような大問題を、単なる感覚からではなくおよそ「研究」として追及するには、膨大な量の各時代・地域における哲学的な図像学に関する書を網羅的に読破せざるを得ず、それは古典語に暗い私にとって、大きすぎる壁であった。

ちょうどその頃、同大学には新規に考古学専攻が発足し、先史土偶、などという話から薦められて、同専攻に移籍することになった。ここには名品主義がないのが救いであったが、一部の彩文土器や土偶などは別としても、美術史の場合とは逆に、発掘されたさして見栄えもしない膨大な量の土器類の形式分類・計測・分析は、正直言ってかなり退屈な作業であった。地域的編年を確立し、異地域間交流の実態をも明らかにするその精緻な作業は科学の名に値するものであったろうが、そのためには測量や遺構・遺物の実測を含む職人芸的な技能が要求され、これらのかたち・モノの背後にある「心性」などは考古学には無縁であるようだった。しかしこのような感覚的・感応の世界に分け入るためにも、常にまず具体的なモノが必須であり、実際に目に見え、手に取り、計測することも写真に撮ることもできるモノ・かたちを通じてこそ、史学で言えば依拠史料のような、文化の内実への確固たる手掛りが得られることを悟ったのである〔佐藤・小西 1977〕。

3 「インド文化」の源流と底流

一方、この時期に参加できた発掘実習ほどありがたい機会はなかった。大学のキャンパスを出て電気も水道もないベンガルのムラでテント暮らしをしながら村びとたちと汗を流した経験は、何にもまして貴重なものであった。作業中の彼らとの語らい、つらい作業後の水浴びののち訪れて垣間見た彼らの暮らしぶり、満天の星の下、どこからともなく現れて歌をうたっていた放浪の詩人バウル、まつりが近づくと米の粉で家の前に描かれた儀礼的抽象文様のアルポナ、その出会いのどれもが、その後40年以上のいまでも私の血となり、肉となっている。また、考古学専攻の主任教授でありながらも、史学にもベンガル民俗学にも造詣が深く、その諸分野間の密接なつながりについて具体的な指導をS・R・ダス教授から受けえたことも幸いであった。ベンガルのムラでは神話も儀礼もそのさいの祭器も土偶も床絵も呪詞も歌も舞踊も、すべてみな暮ら

しの枠内に渾然一体となっており、それぞれを分けることができない有機的・単一のムラの文化をなしている [ドット 1996]。近年の政治的関与さえ除けばそこには必ずしもヒンドゥー・ムスリムの別もなく [モハンティ 1975、1992]、共通のムラ文化が、おそらくは先史時代以来、それぞれの地で形成・展開・発展し、絶え間なく異文化を吸収し変容させながら層序をなしてきたのである。

この層序は、考古学遺跡の発掘の場合のように、明確に上から順に剥いでいくようには明らかにされえない。しかし同様に、時にそれは複雑に重なり合い、ギャップやポケット、パッチをも示しつつ、ある要素は変化しながらも持続し、またあるものは消滅する様相を示しうる。その底深く勢いのある底流・基層文化は、ムラのようなごく限られた地域の文化様相を超えて、より広大な地域、ついには全「インド世界」にまで拡大できる図式を用意するであろう。ただしこの文化層序の発掘は、上層からの考古学的発掘とは異なり、むしろその低層からの掘り起こしが必要であった。そしてムラの場合以上にあらゆる異質の物を飲み込みつつ多様に変容していく多様のインド世界 [小西 1981] の構造を探るには、このような「インド文化の底流」と、その「源流」を探る必要があった [小西監 1995]。

前者に分け入るために、まずはインドのごく普通の人びとの暮らしの文化の諸相 [小西 1986a]、ことにベンガルのムラで女性たちのみが伝えてきたまつりのかたち、すなわち床絵に注目することから始め [小西 1986b]、その儀礼・芸能・神話とのかかわり [ドット 1996の解説]、またそのあり方がベンガルを越えて別種の多様性をも示しながらもインド中に広く分布していることを明らかにしようとした [沖・小西 2001]。手掛かりはあくまでも眼前の文様自体であり、そこからその象徴性や神話、儀礼の内実を引き出そうとしたのである。また儀礼芸能にしても、その研究の手がかりはまずは仮面であり [沖・小西 2007]、また影絵人形のかたちであった [コントラクター 1989、小西 2002]。そしてその舞台こそムラ社会であり、その暮らしぶりだったのである [小西編 1997]。

4 周縁から中心へ

このような「インド文化の底流」のありようを探る一方では、「インド文化の源流」としてのインダス文明に関する考古学的研究も進められた

[辛島ほか1980]。実際インダス文明には、はるか4000年後の今にも通ずる文化要素の萌芽として見てとれる面が多々ある。当時の人びとの生活のあり方やその背後の諸観念、すなわち母神や水に対する豊饒儀礼、動物（ウシ）・植物（インドボダイジュ）への信仰、同業者集団を思わせる社会制度、農耕の技術や生業のパターンなどもそうであるが、より具体的に比較検証できるのが、家の間取りや屋敷取り、陶器や金属器の器形と製作技法、冶金の失蠟法などの物質的事象である。その検証には、単なる思い付きや類推ではなく、実際のモノを介しての緻密な手続きが踏まれる。こうして、一見いかにも些細な事物がより本質的な事柄に迫ることになり、換言すれば、周縁こそが中心を明らかにすることとなる。方法としてそこに動員されるのは、考古学・民族学のみならず、実に多様な分野にわたる諸知識である。

また従来は、インド文化を「大伝統」と「小伝統」に区分し、あたかも前者が後者を圧倒しつつ、中心から周縁へと拡散・浸透していくような文化史的枠組みが援用されることがあったが、考古・民族学的事象からするとむしろその逆が真であることも多い。かえって中心が周縁から多大な文化要素や活力を吸収し、新たな中心を再編成・形成していく過程も見えてとれるからである。少なくともこの場合、中心・周縁、大小・上下の関係は、一方的なものではなく、双方向的な相互関係である。したがってその関係は、「優れた」中心からの「遅れた」周縁への文化伝播・拡散を意味するものではなく、またその展開も、「変化」ではあっても「進化・進歩」が問題となるものではない。それはむしろ、かつての文化進化論や伝播論、文化圏説のようなグランドセオリーとはまったく異なった次元のものである。また文化を重層性として受けとめるにしても、一定の層の直上あるいは直下の層との関わり、連鎖はきわめて微妙かつ複雑で、考古学の場合のように上下の層位を明確に区切る線が引けないため、なおのこと他の隣接分野の援用が必要となるのである。

一方、ある文化要素をとりあげれば、そこには一定の地域的分布図ができてくる。しかしその分布範囲は、他の文化要素に目を移した場合の範囲とは異なってくる。インドの地域区分といえはふつう言語分布が注目され、実際それが政治的「州」単位の決定に援用されているのに、主食・食用油・家屋・間取り・服装・履物などの生活文化の諸領域を取り上げてみると、意外にもその分布図はすべて相互に異なり、ほとんど重

なり合うことがないことがわかった〔小西 1985〕。人びとがある地域への帰属を意識する場合、それは彼らの文化・社会の、どのあり方に意識を向けるかによって違ってくるのである。

5 「南アジア」の地域的構造

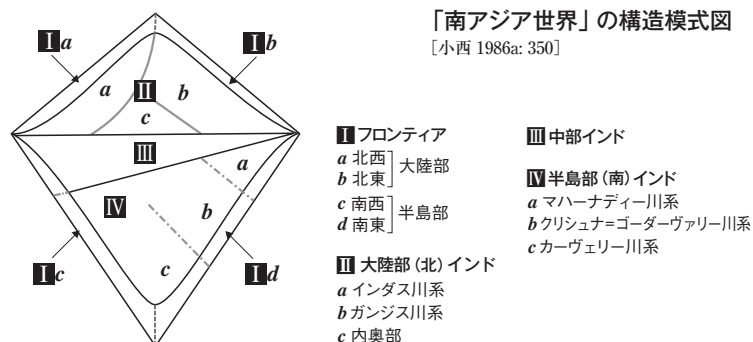
このような生活文化の範囲は、政治的「言語州」の範囲、あるいは国境をも超えて、他の地域へと緩やかなグラデーションを描きつつ連鎖・移行する。そこでは政治的単位である国としての「インド」なる範疇は意味を成さないばかりか、人びとにとっておクニとして意識される地域・民族文化の理解上有害ですらある。またこのように、文化や言語すらが国境を越えるのに、隣接する諸国を含めてなおその範囲を「インド」の名のもとに「インド世界」として捉えてしまうには問題がある。政治・経済力からすれば、国としてのインドが中心を占めすぎていることに躊躇を覚えながらも、やはり「南アジア」という概念がより有効なのであろう。それは地理的にも、西アジア・中央アジア・東アジア・東南アジアに隣接し、それぞれとの境界は、亜大陸北半の大陸部は険峻な連山によって、かつ南半の半島部は大洋によってほぼ明確に区分される世界だからである。

そうであれば、この世界を外から規定する隣接地域との関係で、インド世界のフロンティアをなす地域が最重要となる。かつて私はインド世界の構造を模式図として表す試みを提示したが〔小西 1986a: 終章の図〕、そこでⅠとしたフロンティア地域は、さらにa, b, c, dとして区分された(図参照)。大陸部で西アジア世界と接するⅠaはアラビア海に面したⅠcとともに先史時代以来先進的文化の移入を受け、いわゆる北インドのⅡa, Ⅱb地域での大きな文化展開を促した。同じフロンティアながらⅠb地域は険峻なヒマラヤによってその先のティベットの中国世界をインドから隔絶したが、それでも独特のネパールあるいはアッサムなどの北東部の文化、あるいは山あいの間隙を縫って流入してきたオーストロ=アジア文化が、豊かな原初文化としてⅢ地域東半の一部として息づいている。そしてⅠd地域が、南インドに発展・展開した高度な文化をさらに大海を通じて東南アジアに発信した重要な地域であったことは言うを俟たない。このようにフロンティアとしてのⅠは、外界との関係で、a~dの各地域を通じてこそ、「南アジア世界」を規定するのであ

る。

これまで南アジア世界は、「インド」として、あたかも内陸北半のⅡがその中心であるかのように捉えられてきた。しかし、ことに東・東南アジアなどとの関係においては南半・半島部のⅣがもう一方の中心であったことが明らかである〔辛島編 1994〕。しかも各大地域は、その内にさらに中心と周縁を擁する複数の地域を内包している。大別して北半とされてきた地域では、歴史上も重要な位置を占めた西半のインダス平原部と東半のガンガー平原部はもとより、その両者に挟まれた内陸部（図中のⅡc）も無視できない。また北部と南部のあいだに、西部の一部をとりこみつつ東方に広がるクサビ状の中部（Ⅲ）の存在が、南アジア文化の源流・底流を知る上で、きわめて重要である。原住諸民族が住むのはこのやや内陸の中部山地であり〔小西監 1995〕、また一部アラビア海にも面した地域を含む低平な西部は、南北文化の交流する回廊の役割をも果たしてきた。そして南インドにあたるⅣ地域は、それぞれさらに北西から南東に流れる大河流域で区分できるように思われ、その文化展開もまた、考古学的証跡からしても、北西から南東方向のものであったように思われる。

上述のような地域区分の詳細についてはここでは議論を尽くしえないが、亜大陸中の地域を大きく区分してみたこの模式図をさらに緻密なものとするには、これらの地域の中にさらに入れ子状となっている、「中心-周縁」構造からなる中小地域の具体的あり方を、実際の地域において明らかにする必要がある。こうして初めて、「インド世界」あるいは「南アジア」の実体が総体として捉えられることになるであろうし、またそのさい、中心・周縁のあいだを、あるいは地域間をまたいで往来、移



行するヒト・モノ・文化の流れを、面としての地域の把握のみならず、「道」すなわち線を通じての動態として追うことも当然必須となるのである〔小西・宮本編 1995〕。

6 「南アジア学」の課題—「周縁」への視点と諸学統合の必要性—

概して「周縁」とされてきた諸地域は、フロンティアのⅠはもとより、ⅡcやⅢ地域なども原住民の少数民族の居住地域でもあることから、あたかもこれらの地は、インド史上大きな役割を果たすこともなかった特殊地か例外地であるかのように無視、あるいは軽視される傾向があった。しかし、彼らが現実にインド文化の源流と底流を担ってきたこと、またこの地域が外来・異文化の移行・移動とその変容をダイナミックに促してきた文化史上も重要な地域であったこと、さらにその内奥部などでは政治権力の台頭や一時的避難・再興を用意した「レフュジー地域」としても機能したことを忘れてはならない。その「周縁性」は、かえって「中心」を照射する鏡なのである。

このような周縁諸地域の文化的様相は、狭義の史学をはじめ、確立された人文・社会の諸学では明らかにされえないことが多く、むしろより広い視野に立つ人類学・民族学・民俗学・考古学などの視点や方法が必要とされるであろう。総合的に「南アジア」を俯瞰して把握・理解するためには、地域上も学的方法論上も、ネパールやスリランカなどを含めた「周縁」からの視点が不可欠であるように思う。しかし現実には、南アジアに関する諸学を統合し、総体としての南アジアを理解するために新たに「南アジア学」を標榜して発足した本学会でありながら、その理念はややもするとときに薄れ、学会での研究発表も専門領域に閉じこもりがちとなるふうのあることは残念である。

研究自体は、学問として専門的であるほどよいのであろうし、その雄厚な蓄積が学会の価値を高めているのも事実であるが、それらがそれぞれ他の研究とどこで結び合うのかが、たとえばシンポジウムなどを重ねることによって問われてよいように思われる。少なくとも周縁的とされる複数の諸学を相互に認知し²、それらを（個々の研究者でなくとも）せめて学会で統合してそれらの有機的関連が求められることが望ましい。

「南アジア学会」である以上、専門とするところは南アジア学であってほしく、学会名簿でも私はその専門分野を「南アジア学」としているが、

どうも他例はないらしい（私の場合は「南アジアを学ぶ」というより、「南アジアに学ぶ」の意を込めているつもりなのだが）。とはいえ私も、大風呂敷をひろげつつも、実際には当然、事物に基づく細かい事象の解析を、着実に積み重ねていくよりほかはない。

註

- ¹ なおこの2007-08年には、同様の趣旨で回顧譚を語る機会が多々あり、ことに07年7月に清水市三保で開催された第40回記念南アジア研究集会では筆者は「戦後のインド史・インド文化研究」という発表を行い、資料としてかなり詳しい年譜を配布した。詳細はそれに譲るが、同発表に基づくやや視点を変えたレビューは、[小西 2009]が、年譜の大半をも採録してまとめている。なお南アジア学会第20回全国大会全体シンポジウムでは、歴史学・文化人類学研究のレビューも大石[2008]・田辺[2008]によってなされているので参照されたい。また日本の民族学・文化人類学界での南アジア研究の展開は、上記[小西 2009][田辺 2008]のほか、[日本民族学会編 1966: 1986]、[クライナー編 1996]などの南アジア関連諸章をも参照。
- ² 最近、ある南アジア研究者の言に、日本にはインド考古学研究がなされてこなかったかのごとき発言があったと聞く。やはりかつて、ある日本の仏教者に、インドでは考古学が「遅れている」と言われたときと同様、大きな衝撃を受けた[小西 2009]。学会としての発足だけ見ても、インドでは中央政府考古学局が発足したのは150年近く前の1861年（日本で言えば文久元年）であり、一方、日本でインド考古研究会が設立されたのは1966年と、それでも南アジア学会の発足より22年前のことである。せめてこれからも、精確な情報をもって諸学を横に繋ぐとともに、一般にも情報を開く役割を、地域研究の学会としての南アジア学会は担ってほしいと熱望する。

参考文献

- 大石高志、2008、「歴史研究の変化と展望―分散、拡散、還流の中の地域像をもとめて―」、『南アジア研究』、20、190-207頁。
- 沖守弘・小西正捷、2001、『インド・大地の民俗画』、未来社。
- 沖守弘・小西正捷、2007、『知られざるインド―儀礼芸能とその造形―』、清流出版。
- 辛島昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一、1980、『インダス文明―インド文化の源流をなすもの―』、NHKブックス、日本放送出版協会。
- 辛島昇（編）、1994、『ドラヴィダの世界―インド入門Ⅱ―』、東京大学出版会。
- 小西正捷、1981、『多様のインド世界』（人間の世界歴史8）、三省堂。
- 小西正捷、1985、「生活文化の諸領域―暮らしのかたち」、辛島昇（編）『インド世界の歴史像』（民族の世界史7）、山川出版社、95-124頁。
- 小西正捷、1986a、『インド民衆の文化誌』、法政大学出版局。
- 小西正捷、1986b、『ベンガル歴史風土記』、法政大学出版局。
- 小西正捷、2002、『インド民俗芸能誌』、法政大学出版局。
- 小西正捷、2009、「インド史学・考古学・民族学研究との半世紀―私的回想―」、『インド考古研究』、

30、41-62 頁。

小西正捷（監）、1995、『原インドの世界—生活・信仰・美術—』、東京美術。

小西正捷（編）、1997、『アジア読本・インド』、河出書房新社。

小西正捷・宮本久義（編）、1995、『インド・道の文化誌』、春秋社。

メヘル・コントラクター、小西正捷（監訳・訳註）、1989、『インドの影絵芝居』、現代人形劇センター。

佐藤宗太郎・小西正捷、1977、『インド民芸—民俗のかたち—』、木耳社。

田辺明生、2008、「構造から生成へ—南アジア社会研究の過去・現在・未来—」、『南アジア研究』、
20、208-225 頁。

グルシヨドイ・ドット、小西正捷（訳注・解説）、1996、『ベンガル民俗芸術論』、穂高書店。

日本民族学会（編）、1966、『日本民族学の回顧と展望』、日本民族学協会。

日本民族学会（編）、1986、『日本の民族学 1964-1983』、弘文堂。

プラフル・モハンティ、小西正捷（訳）、1975、『わがふるさとインド』、平凡社。

プラフル・モハンティ、小西正捷（訳）、1992、『わがふるさとインドの変貌』、平凡社。

こにし まさとし ●立教大学名誉教授 (mkonishi@ka2.so-net.ne.jp)